

浄土

12
the JODO
1993

11、12月合併号

今月の随想

岡 奈理子 五社 巴

下北半島紀行 夏 攸吾

念仏信仰の系譜⑤ 須藤隆仙

TVキャスターのアンクル④ 利根川 裕

〈座談会〉いい来世のために、いいことしたい

非情の世界の発動を 前田利勝

使命感と死生観

伊藤桂一



法然上人鑽仰会発行

心行きかう道標。



優しい気持ちに戻って、
大切な人と
話したい時間がある。
人と人との思いやり、
心をこめてかわす会話。
毎日の暮らしの中の道標。
0088はあなたにとって
そんな存在になりたいと
考えています。

ますますおトクになりました。

0088はご加入にかかる費用も、基本料金も無料です。

お申し込み・お問い合わせは、日本テレコムお客様センターへ

フリー
コール  **0088-82(無料)**

または

 **0120-0088-82(無料)**

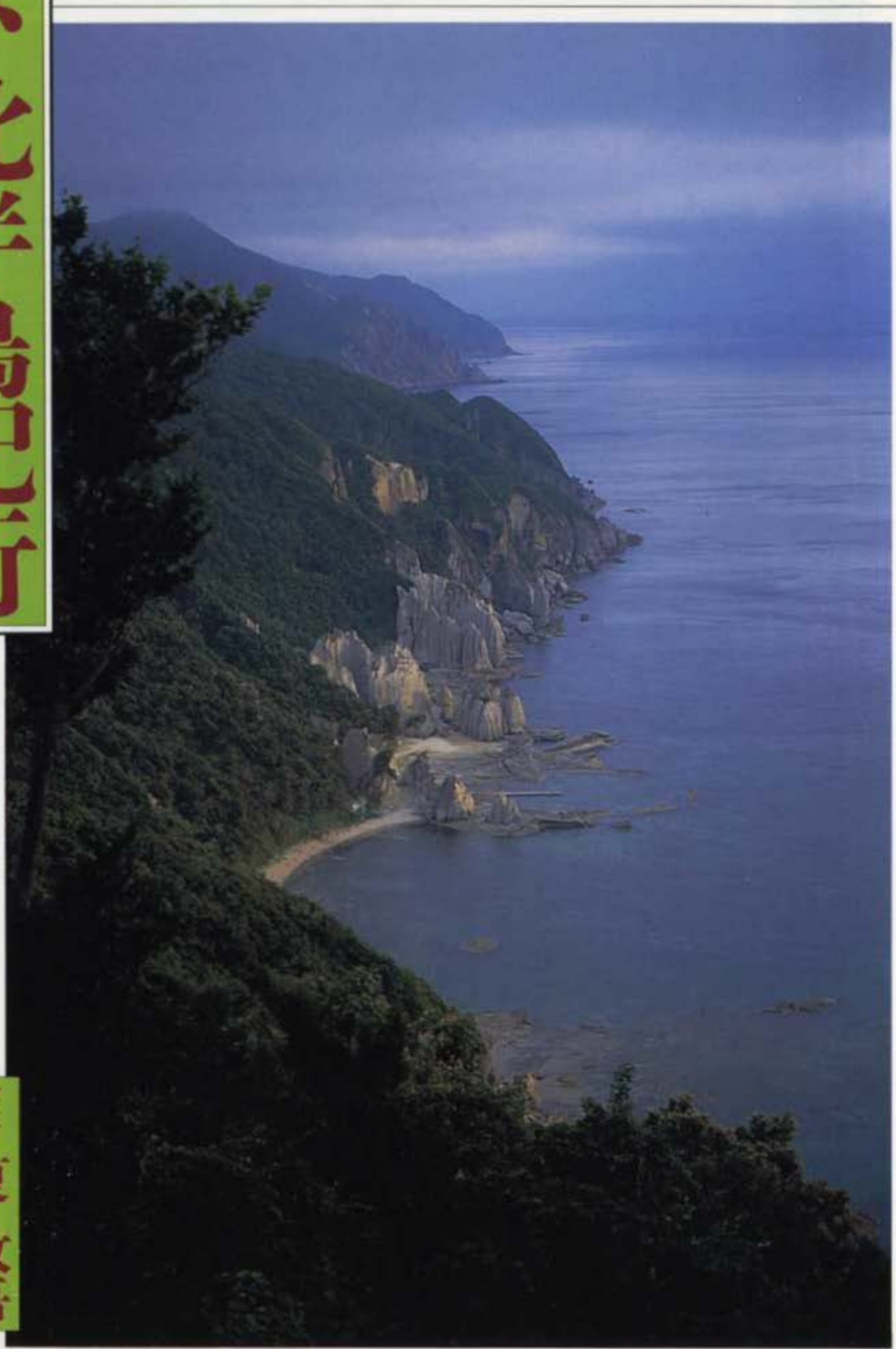
● 受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

日本を楽しくする電話

0088

下北半島紀行

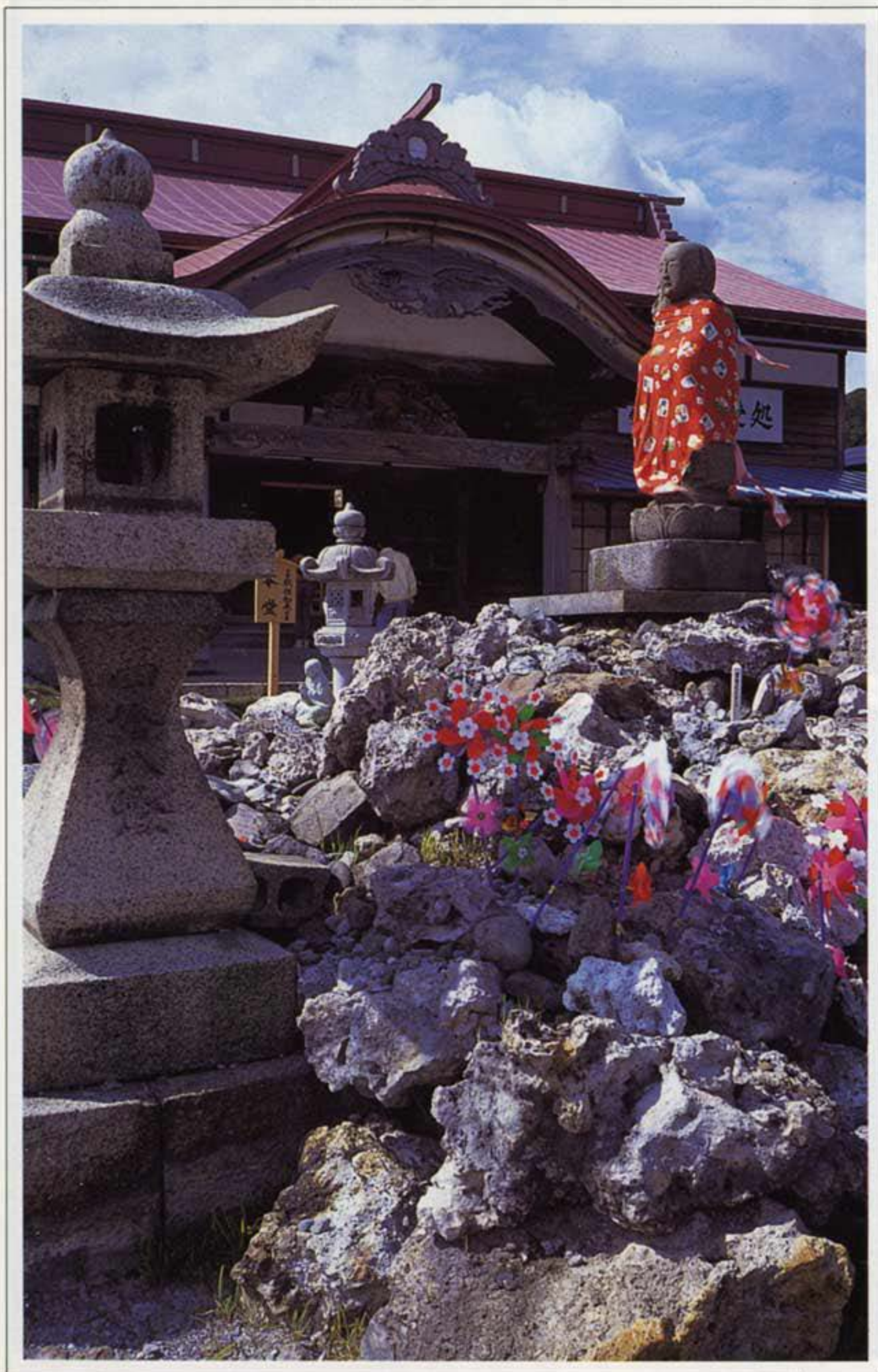
写真—夏 攸吾



“恐山奥の院”の仏ヶ浦



恐山人り口、三途川の太鼓橋



境内のあちこちでカラカラ回る風車



野辺地の港、帆立の水揚げ(上)、下北交通、下北駅(下)

浄土

1993/11、12月合併号

目次

下北半島紀行——**口絵**……………写真=夏 攸吾 3

今月の随想

『生を手渡す』……………岡 奈理子 8

父・五社英雄の死……………五社 巴 12

下北半島紀行……………夏 攸吾 16

念仏信仰の系譜——**⑤**……………須藤隆仙 26

テレビキャスターのアンクル——**④**

テレビキャスターとは何か……………利根川 裕 32

座談会

いい来世のために、いいことしたい……………37

非情の世界の発動を……………前田利勝 50

使命感と死生観……………伊藤桂一 58

編集後記……………66

表紙撮影=落合泰三

『生を手渡す』



岡 奈理子

冬が巡った。水墨画の風景がひっそりと息づいている。日本の四季がことのほか豊かで優しく感じられるのは、輪廻りんねてんせい転生を毎年彩りを添えて眼前に示してくれるからかもしれない。ゆったりと推移する日本の春夏秋冬は、生まれ死に、そしてよみがえり、また死ぬ生命の繰り返しを、美しい自然の彩りで語ってくれてでもいるようだ。

死には二つある。種としての死と、個体とし

ての死である。生物すべては、この二様の死から免れない。数十万年、数百万年、あるいは数千万年という遙かな時の流れで生じる種としての死は、暮らしの意識にはのぼらない。私たちが向き合うのは個体の死である。

今夏、父を失った。父は十日間寝て逝った。肉体は減んだが、父は私に宿り、共に動き、走り、生きている。父が逝って初めて経験する不思議な感覚だった。肉親という字面が、人生を

半ば生きた今、はじめて具現化した。父の命が私の心と体に連なる不思議さに、子供のように驚いた。命が連なる不思議さは、生を受け、生を手渡し、死ぬことの根元的な意味そのものから来るようだった。

生と死をめぐる根元的な意味とは何であろうか。父の死を離れて、生物一般のこととして述べさせていただこう。

生を受け、手渡し、死ぬ。ほぼすべての生物が従う法則である。ほぼと書いたのは、細胞分裂を繰り返して増殖するアメーバーなどの単細胞生物には、個体の生理的な寿命はないからだ。分裂前の母細胞は、分裂後も、事故などによる死を除き、無限の時を生き続ける。だが、私たち多細胞生物は、どの分類群に属するものも、個体は必ず死ぬ。生を受け、死ぬことこそが、子

孫を繁栄させ、種そのものを生き延びらせる唯一の方法であることを、どの生物種もおのが生きざまを通じて語っているかのように見える。

たとえばサケに例をとろう。成熟し、海から川に入り産卵し、授精させた直後、雌雄すべてに等しく訪れる死。河口にひしめき。苦難の末、母なる川を遡上して迎えてくれるものが、授精と同時にくるサケ一匹一匹の命の終末であることを、私たちは心情的にむごく感じる。と同時に、そこにおごりかな自然の摂理をもみる。ある種のクモやカマキリは、交尾が終わると雌は即座に雄を食う。子を産む母体が生き残るための過酷な選択である。あるいは、交尾が終わったある種のネズミの雄は、副腎から出る大量のホルモンで自動的に死ぬ。こうした動物たちの交尾直後の死の引き金は、主として親が子を食う共食いの可能性を断つことからくる。なぜな

らたとえば大量のサケの成魚が狭い川で産卵後も生き続けるためには、体の大きさにふさわしい大量な餌が必要とされる。一匹の親が一度に数百から数万個もの卵を産む多産型の魚類の親は子を認識しない。授精を終えて海に下るまで、自分の卵、あるいは同種の卵を食べ尽くすことは十分予想される。あるいは子が孵化して滞在する良好な餌場の温存をはかることも大切だ。

破壊的な共食いの危険性と良好な餌場の温存などの幾つかの必然から、サケは一度の繁殖直後に、死の引き金をひく戦略を培った。共食いを避け、餌場を手つかずに温存する行動は、彼らの拒食が川を遡上する時にすでに始まっていることからもしのばれる。こうした動物にみられる授精後の死亡は、共食いを断ち、有限な餌場とすみかを次世代に手渡すための、種の存続を賭けた大いなる計らいといえよう。

こうした多産多死動物に比べて、生理的寿命がはるかに長い中・大型動物の多くは、少産少死の繁殖設計とライフスタイルを持つ。多くの哺乳類や鳥類などの少産少死動物では、子は大きな体で生まれ、親は早い時期に自分の子を見分ける手段を持つため、親による子の捕食の危険性は極めて少ない。子の数が少ないため、彼らの多くは子を産んだ後も、子への給餌や教育、外敵からの防衛などに応分な投資を行なうことで、子の生存を確実なものにしようとする。その年子育てに失敗しても、経年繁殖で子孫を残そうとする。長期間にわたる子育ての最中、自然界では死は外的理由でもたらされる。まれに生き残っても、彼らもまた体の一つ一つを構成する細胞群の死という内的引き金で死を迎える。少産少死や多産多死型動物のいずれにも共通するのは、より多くの子孫をいかに確実に残す

かに戦略が絞られていることだ。いずれの場合も親は命をつなぎ終えた時に自動的に死ぬように仕組みられている。

なぜ世代交代で命を存続させる道を選んだのだろうか。単細胞生物のように個体レベルで永遠に生き続ける細胞と、その細胞群を統括する生体システムを得なかったのだろうか。それは地球の環境変化によりよく対応するためという明快な理由があるように思う。

地球環境は数万年、数十万年間隔で激しく変化している。数百万年から数千万年単位で、劇的にも変化する。そのなかで繁栄を続けるためには、それぞれの生物種を構成する一つ一つの個体が持つ形質や習性のばらつきが切り札になっているのではないだろうか。変化への対応、それこそが多細胞生物が永遠の命を持つ個体をつくらず、世代交代で環境への適応型を生み出

す戦略をとった最大の理由だといえるだろう。

私たち一つ一つの命が持つ心と体は死を迎える。だが、受け継がれた命は、空に枝を伸ばす大樹のかたち似る。枝葉に分岐し脈々とつながり、私たちは遙かな時を生き、さまざまな変化を示しながら、これからも遙かな時を生き続けるはずだ。すべての生物が従う法則があるとするれば、生を手渡し、そして死ぬこと。生理的寿命まで生きようと、途半ばの死であろうと、生を受け、手渡し、そして死ぬことによつて、私たちの役割は完結される。自然の法則は生き残ってはならないことを逆に示す。

死はすべてに等しく訪れる。風のように、霧のように、消えるときは消えていくのがいいと、私は思う。

（山階鳥類研究所研究員・水産学博士）

父・五社英雄の死



五社 巴

昨年八月三十日、父は京都の病院で息を引き取った。享年、六十七歳。食道癌再発により、全身が癌に侵されての死であった。

父は亡くなる十五年前、四十代の後半に埼玉県川越市内の「東陽寺」というお寺にお墓を建てていた。

東京は下町の北区西ヶ原に生まれ、浅草で育った父が、どうして川越にお墓を建てたのか。

たまたま母の友人に紹介されて、父がお寺を訪

ねたところ、一目で気に入ってその場で決めたという。周りはただっ広い田んぼに囲まれたお寺は、のんびりとした田園風景を思い起こさせる。もうじき九十歳になれる住職は、俗世に染まらず親しみやすいお人柄である。父は、初めてあった住職の人柄にも惚れてお墓を買うことに決めた、とも言っていた。なんでも意気に通じて事を起こすことが好きだった父らしい選

扱だった、と思う。

詳しくいえば、父はまずお墓の土地だけを買
い、五十歳の時に墓石を建てた。あの頃、父は
不幸のどん底につき落とされていた。私の実母
である母が莫大な借金を残して家出し、一家離
散に追い込まれた。続いて、二十一歳になったばかりの私が交通事故に遭い、日赤病院で脳挫傷の手術をうけたのだ。荻窪に建てた一軒家も抵当に入り、お金に窮していたはずの父は、どこからか集めてきたお金で墓石を建て、死ぬ気になって事態を乗り切ろうとがんばった。

その後、父は再婚し、「鬼龍院花子の生涯」

の成功で再び脚光を浴び、私も無事退院することができた。しかし、父は毎年のように遺言状を書いては私に渡すようになった。その内容は簡潔だった。

告別式、葬式は一切無用。死んだらすぐに東陽寺に納骨し、ごく少数の身内だけで別れを行なうこと。香典、献花は受けとってはならない。

まるで私の頭に刻み込んで覚えさせるかのよう
に、何度も同じ文面を書いては私の部屋に残
していった。死は個人的なこと。マスコミの餌
食にされたり、形式や義理で大きな葬式はあげ
てほしくない。心から死を悲しんでくれる人だ
けが、墓前で手を合わせてくれればいいという
のが、死についての父の確固たる信念だった。

また、平成元年三月に癌告知されてからは、私
に会うたびに、必ず言い聞かせるように、

会ったらこれが最後の別れになると思いな
さい
と言った。

どんな出来事も、それが不意に訪れるのではな

く、そのことに慣れることさえできれば驚きは薄まるという。思えば、父は私に突然別れが来ても悲しまないようにと、永遠の別れに慣れるための予行演習を行なったのだろう。その結果、父が亡くなった当日、私は意外と冷静だったように思う。東京の私の住まいから京都の病院に駆けつけたとき、すでに父は虫の息だった。言葉を発しない父の肩にすがって泣き崩れたが、しばらくしてすぐにこれからするべきことを冷静に判断することができた。そのまま遺体を病室に安置し、翌朝川越まで寝台車で運ぶことになった。なんとしても、父の遺言を守って、マスコミにかぎつかれるまえに納骨しなければならなかった。ハッと気がつく、私はその日週刊誌の連載の締切り日だった。なんと私は父の遺体を安置する病室の片隅で原稿を仕上げ、編集部にFAXしたのである。

翌日、東京にもどり、川越に十人ほどの身内が集まって、通夜と告別式がひっそりと執り行なわれた。京都のNHKから父の死がマスコミに流れたのは、父が亡くなってから四日めのことだった。父との約束でテレビや新聞など父の死についてのコメントはいっさい断った。しばらくして、太地喜和子さんの事故死のニュースがマスコミをにぎあわせ、誰も父についてコメントを求める者はいなくなった。

日がたつにつれ、父がいなくなった寂しさが身に染みだ。京都に住む父と毎日のように電話で話していた。人がいなくなつて悲しいのは、相手とコミュニケーションできなくなることだ。父が亡くなって初めて、精神的に親離れしていない自分に気がついたのである。どういうわけか、毎晩泣けてしかたなかった。まるで肋骨が一本欠けてしまったかのように、胸のあたりが

スースーと痛んだ。

一周忌を間近に控えた八月半ば、私は自分の部屋に仏壇を買おうと思い立った。再婚した母は、父と暮らした京都の部屋に背丈ほどの立派な仏壇を祀っている。母への気がねもあったが、仏壇を祀って心のよりどころにしたかった。主人の知人であるさる住職に相談し、早速、元浅草の仏壇屋に連れていってもらった。

仏壇屋に足を踏み入れるのは初めてだった。

店の人に、どんな仏壇がいいかと聞かれ、

もし家が火事にあつたときに、背負って持ち運べるような大きさがいいんです

と答えたら、周りにいた店の人たちは、プツと吹き出した。言つたあとで、間の抜けたことを言つたと思つたが、半ば本心でもあつた。というのも、父の監督作品「薄化粧」という映画で、緒方拳扮する殺人者が、妻の位牌が入つた小さ

な仏壇を背負つて、荒れ狂う海辺を黙々と歩く場面がある。位牌は石ころだった。仏壇という、あのシーンを思い出してしまうのだ。実際は、人間が簡単に持ち運べる大きさの仏壇では位牌が入らないし、火事のために仏壇を持ち運んだという話も聞いたことはない。

一時間ほど店内を見て回り、縦横約五十センチほどの茶系の仏壇に決めた。位牌に「大監院英岳悟道居士」と戒名を彫ってもらい、一周忌のとき住職に念を入れてもらった。仏壇は六畳間の居間に置いている。私は仕事柄生活が不規則なので、毎朝ごはんをお供えすることはない。気が向いたときに父が好きだったコニヤックやくだものをお供えしている。それでも父はあの世で喜んでいてくれると思いたい。毎朝、仏壇の前で手を合わせると、不思議と気持ち落ち着くのである。

(ルポライター)

下北半島^{まさかり}紀行

文と写真Ⅱ 夏 攸吾

恐山奥の院



本州最北端への誘い

血の個性のはなしから、はじめよう。

まず、濃淡でいえば、たとえば私の血

は濃いらしい。「血の気が多い」という

やつで、若いころ大学の先輩の母堂が大

手術をしたときには、「いい血だから……」

と、一緒に献血した仲間の倍も採られた。

それがいまは、濃くなりすぎた酸性血に
悩まされている。

血にはまた、磁石^{コンパス}のような指向性もあ

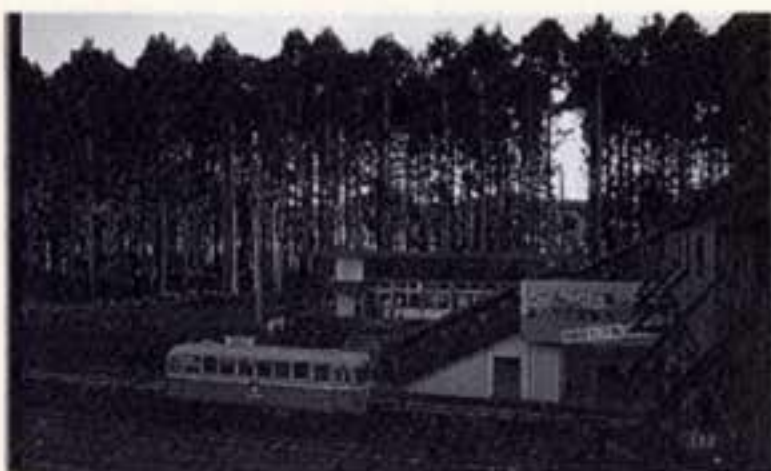
るようだ。日本列島は、西から東にふく

らんで北へと緩い弧を描くが、私の場合

はその弧の上側の北、および内側の日本

海への指向性が強い。旅にでようと思う

とき、とくに条件がない限り、自然とこ



野辺地駅の防雪林、南部縦貫鉄道のレールバスもここから発車する

の方角に足が向く。

いろいろな人に尋ねてみると、それぞれに固有の指向性がある。それには、知識・趣味・情報などの作用もあるだろうが、もって生まれた個性から出発しているように思えてならない。血の磁石にはみな、生まれつきの癖がある……。

よく血液型で性格をうんぬんしたりするが、それよりもこの方角指向型のほうがはるかにおもしろい、夢があるし、だれにも迷惑にならない。だから私は「B(Rh+)型」ではなく、「北帰行・日本海型」ということになる。

そんなわけで、今回も北のはなし。私は上野発の寝台特急「ゆうづる」で青森に向かった。鉄道はもはや、いやおうなく新幹線網の時代、この列車も間も

なく定期運転の表舞台から去る。さんざお世話になった窮屈な三段寝台に、お別れ乗車の気分もあった。

翌朝、歳月を経て高く聳える杉の防雪林に迎えられ、JR東北本線野辺地駅に下車。「北辺」の旅情かきたてる駅名が私は好きだ。

乗り換える列車はJR大湊線、下北半島を目指す。大きな陸奥湾を内懷に抱いて、雄々しく津軽海峡に挑みかかるような半島は、その形から「まさかり」に喩えられる。

列車はその鉞の柄の内側を北上する。おりから九月、穏やかに広がる陸奥湾の海上に群がる小舟は、名産の帆立貝漁。もうじき今年の漁期も終える。

やがて終着のひとつ手前、下北駅に近



本州最北端の終着駅、下
北交通大畑駅

づくと、入線する島式ホームの反対側に人待ち顔の運転手がしゃがんでいるのが見え、ローカルムード横溢する。運転手の脇に待機するイニシャルの「S」をアレンジしたマークの車輛は、第三セクター下北交通。仲のいい兄と妹の待ち合わせ風景のような……それも当然、これはかつての国鉄大畑線。

軍港、大湊への輸送機関として大正十年（一九二二）に大湊線開通のあと、昭和十四年（一九三九）に大畑線が開通、両線が手を携えて半島縦貫が成った。

国鉄時代、両路線を直通運転の列車は、大湊線の残る一駅、下北―大湊間を往復してから、いったん下北駅に降り、おなじ列車が戻ってくるのを待つこともできたのである。

そんな兄貴格の大湊線の列車を、律儀に見送ってから出発する下北交通は、鉞の刃のくびれた首根っ子のあたりを、さらに北へ。

地元と旅人が半々、さして多くもない乗客の車内が、二つめの田名部駅ではもうガラんと空いてしまうのは、ここが半島の産物集散するむつ市の中心であり、霊場おそれざん恐山への下車駅でもあるからだ。

私は、とりあえず終点まで行ってみることにする。樹林と畑地の丘陵を走り抜け、やがて津軽海峡の海に出逢い、終着の大畑は本州最北端の駅、東京から約七七〇キロ。すぐ目の前の港から北海道に渡るフェリーがでる。

旅情ふつつつ、これが不思議でならない、なぜ旅人は端っこが好きなのか……。



想うに、ぬくぬくとした母の胎内より生まれでたときから、人は死の孤独への旅をはじめるのであり、それを象徴する地形が地の涯の岬や、天との境の山頂だからではあるまいか。また逆に、洞窟のような穴ぐらに潜りたがるのは、胎内回帰の願望、やはり死の恐怖と背中合わせの、甘い誘惑からにちがいない。

ともあれ、大畑までくる旅人の目当ては、海峡と太平洋の接点、寒立馬の尻屋崎^{さき}。あるいは大町桂月が「神のわざ鬼の手造り仏宇陀人の世ならぬ処なりけり」と歌った奇勝、仏ヶ浦^{ほとけがうら}である。

万霊の肩に重い霊場・恐山

その仏ヶ浦へは、鄙びた海辺の下風呂温泉、北海道へ最短の港がある大間崎^{おおまき}を



経て行く。海峡の漁火まばゆい下風呂は、帆立の貝殻で烏賊^{いか}げ、そのうろ、（内臓）和えを焼く郷土家庭料理、「げそ火焼^かき」珍味を私に教えてくれたところ。大間はついに敷設されなかったが、当初は大畑線の終着駅になる予定だった。

鉾の刃の切っ先、紺碧の海原を断ち割るような急崖の仏ヶ浦は、青白い硬質凝灰岩の岩肌がさまざまな姿態にさらけだされた海蝕の造形。人に畏怖の念を抱かせずにはおかないが、また夕陽をうけて内から光り輝くが如き情景は神々しくて、恐山奥の院とも呼ばれる。かつて、沖ゆく連絡船のデッキから手を合わせてこれを手を拝む、老婦人の姿を私は幾度も見てきていた……。

この仏ヶ浦で、もうひとつ思い出すの

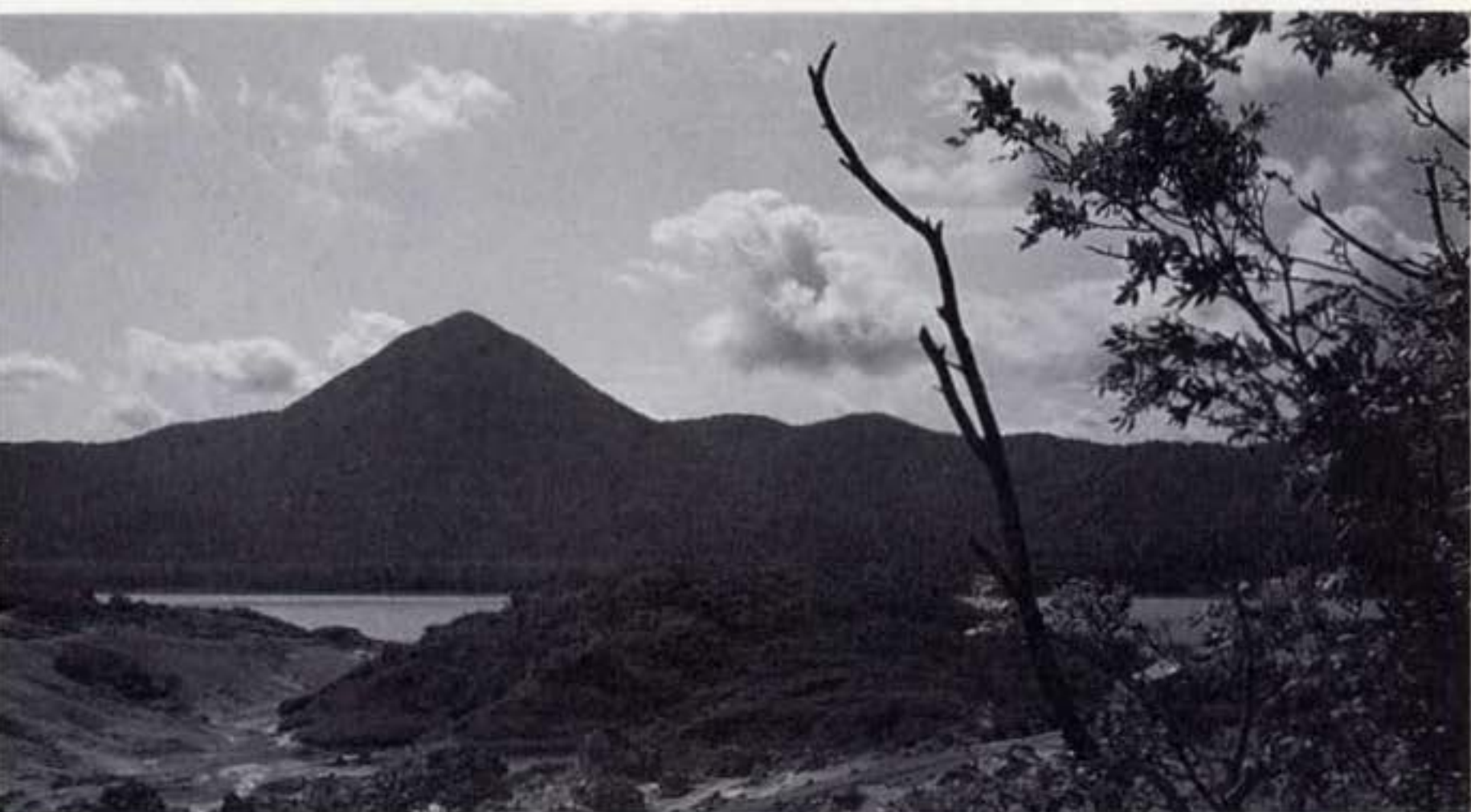
恐山地蔵殿、左に見えるのは湯小屋



は水上勉の『飢餓海峡』。罪深い人間ドラマの名作といつてよく、内田吐夢監督の映画も出色のでき栄えだったが、大いなる疑問もあった。

それは、北海道で殺人放火を犯した主人公が、おりからの台風による洞爺丸転覆遭難という惨事のどさくさにまぎれ、盗んだ小舟で津軽海峡を漕ぎ渡り、仏ヶ浦に辿り着いたという設定である。どう考えても、それは無理というもので、これについては坂本幸四郎『わが青春の青函連絡船』（光人社）に詳しい考証がある。現実と事実に基づく社会推理派の作としてはどうか……ということだ。津軽海峡の激しい潮流は、この小説のプロットを根底から覆す力を秘めている。

さて——。私は終着駅大畑から引き返



し、恐山を訪ねた。慈覚大師円仁の開基と伝えられ、高野山・比叡山とともに並び称される日本三大霊場のひとつ。昔から死者の霊の集まる処といわれ、きわめつき凡俗の私などはつい、霊界にも縄張りがあるものかどうか知らないけれど（東日本の霊がみんなここに来るんじゃない、えらいこっちゃや……）などと思ってしまうのだが、とにかくその引力は現世に生きる者に対しても強く数多の参詣人^{あまた}を集め、現に私なども下北半島まで来てここを素通りはできないのだった。

私の記憶に染みついた恐山は、そこを歩くうちに徐々に増していく両肩の重さである。霊に重さのあるわけはなく、しかし実際に重い……といっても、のしかかるような性質^{たち}のものではなく、たとえ



ばスキップするような軽い動きを抑えられる感じ、とてもいいおうか。

地蔵堂に納められた死者の遺品の生々しさ、硫黄まじりの石原の荒涼とした地獄、宇曾利湖のシンと妖しく静まりかえる水の蒼さ、そうしてことにも、境内路傍や賽の河原の石地蔵に供えられ、カラカラまわる風車が心理に影響を与えるものらしい。

しばらく訪れないでいた間に、恐山の堂坊はほとんど奇麗に新築され、びっくりするほど明るくなったぶん、肩にかかる重さもいくらか軽くなったようだが……。

それにしても、気になるのは風車である。なぜ風車なのか……。それはたしかに、古典的でいまでも人気の衰えない玩具

ではある、が果たして、それだけの理由だろうか。そういえば、各地にある賽の河原や水子地藏にも、決まって風車だ。はつきりした由来は、いまだにわからない



い。ただ、昔の紙でできたものと違い、壊れにくくなったセルロイドの風車が、淋しくカラカラと鳴ってまわり続ける、あたりに人気もない風景は、余計にこの世への未練をかきたてるようで痛ましい。

恐山は、死者の霊を呼び寄せる巫子いたこの口寄せで有名であるけれども、私にそれをしてもらう勇氣はない。また、境内には温泉が湧き、湯小屋もあるが、浸かる気にもなれない。

凡俗で、娑婆さばつけ恋しく、食い意地のはった私は、そそくさと野辺地の宿、馬ま門温泉かどに逃れ、翌朝、天然帆立殻付きの宅配を頼んで帰京した。かつて板場の経験もある私にとって、帆立は思い出深い食材のひとつ、だがそのはなしはまた別の機会に譲ろう。

好評発売中



いのちを看取る

◆D・E・S◆

臨死問題研究会編

せまりくる死を前に、

生の最後のいとなみは、

どうすれば人間の尊厳に

ふさわしくあるだろう。

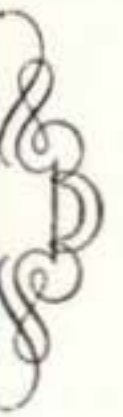
小林完吾、種村健二郎、寺本松野ほか
9氏が、みずからの体験を踏まえて
語る生のすがた。

世界一の長寿国・日本。だが、個々の「いのち」が十分に尊重されているといえるのだろうか。老いの「いのち」病の「いのち」障害ある「いのち」、そして確実に訪れる死。生のあらゆる局面を人間らしく生きるために、われわれはどうあればよいのかを、生と死を眼前に見据えてきた人々の証言からさぐる。

◇四六判上製カバー装 1800円

▶定価は消費税込み

春秋社 101東京都千代田区外神田2-18-6 ☎(03)3255-9611 振替東京8-24861



連載⑤

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

龍樹菩薩のお念仏

前回、大乘仏教というものがどうして生まれたかということ、ちよつと申し上げまし

たが、大乘仏教というものは、革新派の大衆部に源流があるのであって、その大衆部というのは、人間の凡夫性というものを正直に見すえているわけでありませう。そのことは前述

の「大天の五事」や「十事の非法」にもよく現われていることとあります。

大衆部は、大乘仏教の萌芽といつてよいのであります。大乘とは梵語マハーヤーナで「大きな乗り物」を意味し、自分一人の悟りではなしに、多くの他者を救う巨大な乗り物というわけですが、小乗はヒーナヤーナで「小さな乗り物」の意です。大乘仏教というものが大きく発達してきたのには、在家信者の盛り上がりがあったのです。釈尊の遺骨を納めた仏塔の周辺に集まった在家者集団、そして比較的自由な都市生活者、またその支持を受けた熱心な出家者などの中から、仏教改革の運動として興起したものと学説にあるようであります（小学館版『仏教大事典』）

他）。

この大乘仏教を理論的に立派なものに大成させたのは、二、三世紀頃にインドに現われた龍樹りゅうじゆという大学僧でありました。龍樹菩薩りゆうじゆぼさつと崇められております。龍樹は梵名ナーガールジュナの漢訳ですが、龍勝・龍猛みょうなどともいわれます。お名前に龍の字がついているのは、龍は道を達成する存在だからとか、龍宮に入つて開悟したからとか、種々の伝説がありますが、それだけ尋常平凡な方ではなかったという話でありましょう。

この龍樹菩薩こそ、インドでお念仏について大切な大切なことを教えられたお方なのでありまして、浄土教においては、非常に重要なご存在であります。今回はそのことを述べ

させていただきます。

龍樹菩薩は古来、「八宗の祖師」と呼ばれるほどの仏教興隆のお方です。人によつては「第二の釈尊」とまで絶賛しておられます。ところが、その生い立ちをみてみますと、これはこれは、もう大変な大変な過去があるのでございます。前に名の出てきた大天師もそうであります。人間としてまことに尋常ならざる過去であります。

龍樹菩薩（以下、菩薩と記す）は、南インドのバラモンの家に生まれられました。バラモンというのは、インドで最高階級といわれた祭司僧の人たちですが、若い時の菩薩は今でいえばとんでもない不良少年であつたように、以下のような話が伝えられております。

菩薩に三人の悪友がおりました。この連中が、宮中に忍び込んで宮女たちを犯そうとの悪だくみを企て、そのためには隠身の術を習つて忍び込もうと相談してこれを習得し、実行するのであります。宮中では美女たちが原因不明で妊娠して大騒ぎとなり、王様は隠身の術を使った悪者の仕業を見破つて、夜中城門すべてを閉めさせ、多数の兵に剣で空を切らせたところ、三人の悪友は切られて姿を現わしてしまふのですが、菩薩だけは王様の椅子にへばりついて難を逃れたのであります。

この事件で菩薩は猛反省し、出家したといふのであります。その後は持ちまへの才能にものを言わせ、小乗の教えをマスターして大乘の教えに移り、前記のように大乘仏教の大

成者となるのであります。頭脳も修行方法も尋常ではなかったようで、すべての仏典を九十日で読解したとか、龍宮から經典を持ってきたとか、お伽話のようなことが伝えられておりますが、常人ではなかった証左といえましょう。

著書も多数で「百本論師」などと称されておりますが、特に『中論』『大智度論』『十二門論』『十住毘婆沙論』などは、中国や日本の仏教に大影響を与えたのでした（これらの中には学問的に疑問視されるものもある）。その主張するところは、有とか無とかの両極に片寄らない中道の立場を教え（これを空ともいう）、まさに大乘仏教の大成者・宣揚者なのであります。

さて、この龍樹菩薩に、大変なお念仏の教えがあるのであります。菩薩は前述のように「八宗の祖師」といわれるお方ですから、念仏の教えもあるのは当然のことではありますが、それが説かれているとして古来から有名なのが『十住毘婆沙論』であります。これは『華嚴經』十地品の注釈書ですが、この中に、仏法には難行（難しい行法）と易行（易しい行法）とがあるとし、その易行とは、たくさんのお子様たちを憶念敬礼し、その名を称えれば（称名）、不退の地位を得ることができると述べられているのであります。不退の地位というのは梵語でアヴァイヴァルテイカ、阿鞞跋致とか阿惟越致などと音写しますが、文字どおり退転しないこと、逆戻りしないことと

ありまして、つまりエスカレーターの第一段を踏むことであります。あとは退転せず、ずっと仏道成就へと進めるわけであります。

しかも、大切なところは、そのたくさんのお子様たちの中で、阿弥陀仏のみ名を多くあげられ、ときには「阿弥陀等の諸仏」と表現せられて、阿弥陀仏を諸仏の代表仏格とされておられるのであります。ここに龍樹菩薩の並ならぬ阿弥陀仏信仰を見ることができるわけであります。

もつとも『十住毘婆沙論』については、近年、その真作か否かを疑う学者もいるのであります。それでは確実に菩薩真撰とするものの中に阿弥陀仏のことがあるかどうか、他に証拠を求めてみますと、これが立派にあるの

であります。それは菩薩が友人である東インドの王に与えた訓誡がありまして、『龍樹菩薩勸誡王頌』^{かんがいおうじゆ}といわれているものですが、その中で菩薩はこの友人の王に「生まれかわつては病・老・貪欲・怒りなどを除き、仏国土における尊き師無量光（阿弥陀仏）と同じように、寿命が無量である世護者とならねばなりません」と勧めておられるのであります（瓜生津隆真訳『大乘仏典・龍樹論集』中央公論社刊）。何という尊いことでありましょうか。王に「死後は阿弥陀仏のようになりなさい」と勧めておられる。もって龍樹菩薩がどんなに阿弥陀仏を尊信しておられるかがわかるのであります。

また学者の中には、『十住毘婆沙論』は漢

訳のみあつて梵本やチベット語などの原本はなく、おそらく原本にあるのは聞名（もんみょう名を聞く）であつて、称名ではなかつたのではないか。漢訳した鳩摩羅什（くまろじ）が勝手に「称名」としたのではないか、との憶説を立てる方もおられますが、たとえ聞名であつたとしても、仏の名を聞いて歓喜して称名へと進むのですから、両者は同じ信仰の中での事象であつて、その信仰が否定されるというものではありません。

とにかく、龍樹菩薩がこのようにして教えの中で阿弥陀仏の信仰、お念仏の信仰というものを宣説されたということは、重大なことでありまして、念仏という一つの流れがだんだん増大されてくる歴史といえましょう。特

に菩薩は初めに述べましたように、不良青年（凡夫）から出発される。これこそ、これまでくどく申し上げてきた浄土教の本源の様相でありまして、なればこそ菩薩の念仏思想をより一層尊く味わわせていただけるのでございます。

なお中村元博士のご教示によりますと、インドのマトウラー博物館に阿弥陀仏石像の台座が保存されていて、西暦一五六年と想定される年号が刻んであり、「一切諸仏を供養せんがために阿弥陀仏世尊の像を建立した」との銘文があるそうでありまして、龍樹菩薩の時代より前に、すでに阿弥陀仏を一切諸仏の代表とする思想があつたことが知られ、これもまた尊いのであります。（函館・稱名寺住職）

テレビビキヤスターのアンゲル

④

テレビビキヤスターとは何か

利根川 裕

さきごろ、テレビ局の報道局長であった人物が国会の証人喚問に呼び出された。この顛末はまことにお粗末なもので、まあ率直に言えば茶番劇そのものというほかないものであった。

国会に呼び出そうと主張したのは、自民党と共産党。つまり野党側である。連立与党側としては、喚問に乗り気ではなかったが、結局は同調することにして、喚問が実現した。喚問はし

たが、与党側からは一人も質問者が立たなかった。与党からすれば、喚問の是非論で与野党がモメたりしたら、肝心の政治改革法案の進行がおくれては大変だから、この際は野党のいいぶんをのんでおいたほうが得策という、ただそれだけのことである。

自民党と共産党がぜひと喚問が必要といい張った根拠は、そのテレビ局の報道が公正を欠

いて、特定の政治勢力に偏向し、テレビ視聴者をそういう方向に導いたのはケシカランというもの。もしそうであつたなら、それはたしかにケシカランことである。が、ここで冷静に考えなければならぬのは、まずテレビ番組がたしかに偏向したかどうかを判定するのはじつに厄介なこと、それを客観的に証明するのは、ほとんど不可能なことである。つぎに、仮りに偏向の疑いがあつたにせよ、いきなり国会という最高権威機関が言論活動に携わっている一テレビ報道局長を召喚するというのは、あまりに事を荒立てすぎよう。少なくとも、かつて例をみないものであつた。報道の公正と言論の自由とは、しばしば対立することのある問題だが、だからといって、これを国家権力側が一方的に裁こうとするのは、はなはだ短兵急なことであつて、

成熟した社会ではありえないことである。

にもかかわらず、今回はそういうことが起つた。その理由は二つある。一つはテレビというものゝが郵政省の認可事業だという点である。ここが新聞や出版の言論企業と違うところである。そしていま一つは、当テレビ報道局長が民放連の会合で、明らかに偏向ととられうる報道意図を述べていたことである。

さてしかし、ここでもすこぶるおかしいことが数点ある。一つは、その民放連の会合は民放連内部の会であつて、なにも天下国家的レベルのものでないにもかかわらず、そこでの一テレビ報道局長の発言が大新聞のスクープとして公表され、公表されることによつて大きな公共的意味のあるものになつてしまつたことである。しかも伝えられるところによると、その発言内

容はただちに自民党議員に通報されていたという。こういう経過がいかにも陰湿で不明朗である。二つは、事態がこうなったときの民放連側の対応があまりにも無定見だったことである。あいまいなうちに、どんどん自民党ペースに乗って、その会合の議事録を提出することになった。民放連側は自ら民放連の権威を下落させていったように思われる。

三つには、その公表された議事録をみると、当報道局長の発言は、いかに私的性格の会合であるとはいえ、あまりにも無邪気に、あまりにも陽気に、自分の手柄話よろしく、政治報道を意図的に誘導したかった、と語っているのである。いい気なものすぎて、正面から取りあげたら滑稽になるようなものである。

そして四つ、国会の証人喚問の場では、当報

道局長はいささかも自説を主張することなく、民放連会合での自分の発言はことごとく荒唐無稽のものであったと証言したのである。

これでは、カサにかかって訊問した国会議員も国会議員だが、証人も証人で、とても言論の公正とか言論の自由とか、政治とマスコミの関係とかいうテーマの話にはならなかった。そして、この証人喚問がその程度に終わるであろうことは、わたしにすら想像できたことである。だからこれは茶番劇としかいいようのないものであった。

ところで、国会の証人喚問はともかく、テレビキャスターとは、いったい如何なる役割りを果たすものか、という問題がある。

数年前、あるテレビ局で「キャスターとは何

か」という討論会があつて、いわゆるキャスターと呼ばれている人たちが参加した。わたしもその一員に加わりかなり発言したが、たがいに論じれば論じるほど、キャスター像はぼやけるだけで、一定の結論などは望むべくもなかった。

キャスターは、まずその言葉の定義どおり、運んでくる人である。情報伝達のための情報の運び屋である。そして、単なる運び屋にとどまらず、ときにはその情報の解説者である。解説とまではいなくても、その情報への反応を語ることになる。そうすることによって情報を、無味乾燥の情報ではなくしようとする。いきいきとした人間的体温で情報を伝達しようとする。

ニュースはニュースとして、ただ情報事実を伝えるだけでいいのであつて、余計なコメントや情緒反応や感想の類いは、それこそ余計なも

ので、情報伝達の邪道である、という見解もある。じつは、わたしは内心、こういう見解になり賛成しているのである。

が、こういう見解は見解として、いまの日本のテレビ界の現実としては、キャスターは無性格で無色透明な情報伝達者とは違った役目を担うことになっている。ニュースが次第にワイドショー化されてきた流れの中で、キャスターは一種のタレント性を持つてくるようになる。

ニュース番組のキャスター、あるいはワイドショー番組のキャスターは、バラエティ番組の司会者のようなタレント性とは違うが、さりとて無性格な透明人間であるわけではない。

さてそこで、キャスターとは一体何なのか。話をわかりやすくするために、新聞に例をとってみよう。新聞には、新聞記者が無署名で書く

記事がある（これが大部分だが）。また論説委員とか編集委員とか海外特派員とかで、署名を入れた記事になっている場合もある。また外部の人の署名原稿の記事もある。

ところでキャスターの発言は、以上の三つのどれに相当するのであろう。テレビキャスターはその顔をテレビ画面にさらしているのだから、その署名性はきわめて高い。だから、まったく無署名で記事を書く新聞記者と同性格のものはいいにくい。さりとてまた外部の寄稿者の署名とおなじ署名性をもっているとも、いいにくいであろう。現にキャスターはその番組によって外部のものではない。外部の署名寄稿者の持っている言論表現の自由とおなじ自由を持っているとはいえないはずである。

というふうにみてくれば、キャスターの署名

性とは、新聞社内部の人で、しかも署名を入れて書く場合の署名性に似たものといえようか。

あえて分類してみれば以上のようなところが、実際のキャスターの発言の中味からいえば、無署名新聞記事のおなじ立場での発言もあり、署名入り社内記事に似た立場のこともあり、さらに外部寄稿者の名に近い立場のこともあろう。

これら三つを、境界不明のままに処理している不思議な人間がキャスターだともいえる。

わたし自身のことを、あけすけにいえば、わたしは文筆業者として署名入りの原稿を、個人的自由と個人的責任をもって書いているが、テレビキャスターとしては、そういう個人的署名性とは違ったところに自分をおいている。キャスターというのは、テレビ文明が作りだした奇妙な人工的人格のように思えるのである。（作家）

いい来世のためにいいことしたい

『浄土』では、四月から「死」をテーマに随想などを連載してきた。「死」を考えることは「いのち」を考えることであり、それはまた、「生きる」ことを考えることでもある。

そこで今月は、この締めくくりとして、浄土宗宗務総長であり、直木賞作家でもある寺内大吉（本名・成田有恒）師と、これからわが人生の始まりという女子学生の村上佐和子さん、平裕子さんの二人に、「死」「宗教」「信仰」などについて話し合っていた。若い二人からどのような話が飛び出してくるか……。

出席者

寺内大吉（浄土宗宗務総長 作家）

平 裕子（明治学院大学生）

村上佐和子（大学予備校生）



左から村上さん、平さん、寺内師



村上佐和子さん

お父さん、お骨になって、
「ああ、いなくなっちゃった」

——平さん

いま、若い人たちの間では

霊にまつわることに関心が高いと
聞いていますが、みなさんの間でも
そんな話がでることがありますか。

村上 話すことはありますが、

そんなに真剣になって話すことは
ありません。私自身「霊」というもの
がどんなものかわからないんです。

——では、死んだらどういう世
界があると思っていますか。

村上 私は、やっぱり、天国と
か地獄があると思っています。

——ところで、平さんはこの九
月にお父さんを亡くされたと聞き
ましたが、お父さんは亡くなって
どうなったと思いますか。

平 うーん、まだ、父が死んで
から日も浅いですし、いろいろな
ことが次から次へとあつて、そん
なこと考えませんでしたね。

寺内 おいくつで亡くなったの。

平 六十八歳です。

寺内 病気は長かった。

平 十カ月ぐらいです。

寺内 その間、お父さんを看病
していて、何か印象に残るような
言葉がありましたか。

平 もう、最後のほうはしゃべ
れなくて、手を握るくらいのコミ
ュニケーションしかできなかった
んです。でもそれが……。

寺内 印象強く残っている。

平 はい。病院にいて、「じゃあ、
もう帰るね」って言って手を握る
でしょ。そうすると、強く握り返
してくるんです。「帰らないで」
って言うてるのかな、と思って、
そのままいたこともずいぶんあり
ましたね。

寺内 子供さんは何人いるの。

平 私を含めて四人ですが、私
が一番下で。

寺内 お父さん子だったわけだ。

平 そうです。

寺内 村上さんは、ご両親は。
村上 健在です。それと兄が一

人。

寺内 じゃあ、ご両親もまだ五十歳代。やはり、身近なところで死を見るのと、まだその体験がないのとでは、死や死後にたいする見方もずいぶんちがうでしょうね。平さんは、お父さんが亡くなって、何処へ行ったと思いますか。

平 家の中がいまだにガタガタしていて、考えていません。それより、死へ向かっている父が苦し



平 裕子さん

んでいるときに、心臓マッサージなんかをして無理やり生き返らせるのを見て、そこまでしなくても、という思いがしました。

寺内 早く解放してやりたいと。

平 そうです。父としてみれば、自分で自分のことができない状態がすごくイヤだったんですね。

寺内 じゃあ、亡くなった瞬間には、もう苦しまなくていい、楽になったと思ったわけですね。死という問題とは別にしてね。

平 はい、それと自己中心的な考えかもしれませんが、「これから私はどうなるんだろう」ということでした。父が亡くなって、これから片親として生きていかなければならないわけでしょう。それとました、お葬式はどうしよう、と。父



寺内大吉師

が死んだという実感がまだなかったと言えるんじゃないかと思えます。焼かれてはじめて、「ああー」って、がつくりしちやって、肉体がなくなったなーって。

寺内 いなくなっちゃったと。平 そうですね。お骨をみて、「いなくなっちゃった」と思いました。でも最初のうちは座敷に祭壇があって、お花があがって、写真もあるでしょう。その写真で父が

笑っているから「まだ大丈夫、大丈夫」と思うんですけど、四十九日の法要をしたとき、伯父が代表で「もう、この家にはいなくなりました。本当に亡くなりました」と言ったときには、本当にいなくなっただんだと思いました。

でも、そう考えると悲しくなっちゃうでしょ。私の場合はどちらかというとプラス思考の性格ですから、父の死も、血が、自分の中の血が父の血だと思って、自分を励まして生きていこうと前向きに考えたんです。でも父が死んでどこへ行ったとかは考えませんでした。

葬式・法事は悲しみを忘れさせる役割も

——寺内師

寺内 村上さんは、ご親戚とか

友達とかで死を間近にしたことはありますか。

村上 いいえ、特にありません。

寺内 じゃあ、死についてもあまり考えることもありませんね。

村上 はい。でも、自分が死んだらどうなるんだろうか、なんて時々考えたりしますが、具体的にはわからないから……。

寺内 死を間近に見ていないから無理ありませんよ。でもその死を遠くにしていくことから、死を造形化して見ることもあるんじゃないですか。

平 村上さんのほうが、私より死後のこととか背後霊に関心は高いんですよ。

寺内 それはやはり、死を遠くにしていくからですよ。平さんの

ように死を間近にした人には、そうしたことが見えにくいんじゃないですか。

平 そうですね。イメージがわかりません。

寺内 で、また、肉親の方が地獄で苦しんでいるなんていうようなことは、考えたくもないし、考えられないんじゃないですか。

平 えー、いやですよ。そんなこと考えたこともありませんよ。

寺内 逆にいうと、生きているときのほうが苦しかったんじゃないかと、そういう感じを持つんじゃないかもしれませんか。

平 そうです。そのとおりですよ。

寺内 亡くなってほっとするよな、ね。
でも、お父さんが亡くなられて

まだふた月でしょ。家の中は落ち着いたんですか。

平 いえ、何から何までわからないことばかりでいまだにガタガタしているんです。いまは白木のお位牌から黒いお位牌に変えるんでどうすればいいとか、また、父がいるときに、「おれが一番はじめに入るかな」なんて言いながら、新しい仏壇を買ったんですが、それが届いて中には何を入れたらいいのかなんて話しているんです。父が何でもひとりでしていたから母も私もわからないんですよ。でも、私の友達にお寺の娘さんがいて、そのお父さんにいろいろ教えてもらって、ほんとうにありがたく思っているんです。

寺内 実際、ぼくらでも経験し

ていますが、身内で亡くなった方がでると、お葬式や法事をしていないとたまらなくなるんですよ。

じつと見たり、考えていたりすると、どうにもたまらなくなるんです。私は高校一年の息子を亡くしているんですが、変な話ですが、道を歩いていて、そこにパツと穴が開いて、そこに息子が引きずりこまれて落ちていっちゃった感じでね。突然死んだから。だから、その穴をじーつと見ていると、今度は自分が引きずりこまれていく感じになるんです。そういうときどうしたらいいだろうか、というのが私の体験ですね。こういうときにお葬式や法事やいろいろなことでみんながガタガタしていると、その穴を見ないですむんですよ。

平 気がまぎれますよね。

寺内 お葬式や法事の意味はちやんとありますが、こうしたこともお葬式や法事の大きな役割だと思っていますね。

平 そういうことが何にもなかったら落ち込んじゃいますよね。

寺内 私の寺の近所でこういうことがあったんです。ひとりっ子の受験生が受験に失敗して、自殺をしちやったんです。葬儀はしましたが、ご両親が落ち込んじゃってね。ほとんど人付き合いもなくなっちゃった。そして一周忌のときに母親が自殺したんです。旦那さんはショックだったんですよ。その翌年の三回忌にとうとう自分も死んでしまった。

平 えー、やだー、かわいそう。

寺内 そう、本当にかわいそうでした。あのとき、もっと親類や身近な人がガタガタやっていたら、そんなことにはならなかったんだろうと思いますね。

——ところで、いま平さんはお仏壇を買ったと言っていましたか、いままで家には仏壇がなかったんですか。

平 いえ、ありました。古くなっていたから新しいものにしようと。

——では、その仏壇に毎朝ご飯などを上げるのは見ていましたよね。

平 ええ見ていました。私なんかには、なにか儀礼的に思えるんですが、うちは古風な家なんです。そういうことは重視するんです。ですから、母は毎朝日課のようにやっていましたね。

——村上さんの家はとうですか。

村上 うちも仏壇があります。

やはり母が毎日お茶とご飯を上げています。それはなんていうか、おばあちゃんなんかそこにいて、私達家族が話したりしていることを、その中から見たり聞いたりしているという感覚でいます。

寺内 平さんのお父さんも、これからお位牌としてご仏壇に祀られるわけですが、先ほど、平さんはお父さんの血を受け継いだと言いましたよね。その血というのはどういうものかと思っていますか。

平 私はいいいところだけ受け継いでいるとは思ってないんですね。父の頑固なところとか、ひとりです勝手にどんどんやっていっちゃうところなんかも受け継いでいると

思っているんです。

寺内 それは逆に言えば、美德になるね。がんばりやで意志も強くて、ね。

平 そうとも言えますね。それから、近所の人たちは父を、「あの人は人の悪口を言わなかった人だ」って言うんですね。でも、私はそういうところ母に似ているのかもしれないが、言っちゃうんです。だからこれからは、父の血を受けているんだから、そういうことは言わないでいきたいな、って思っているんです。

『浄土』なにそれ、アヤシイ

思想的なことが書かれてそう

——平さん
——村上さん
——いま、平さんが友達なんか

と話をする話題はどんなことですか。

平 友達によっていろいろ違いますが、さっき言ったお寺の娘さんとは一緒に雑誌を作っているんで、その話ばかりになりますね。

寺内 どんな雑誌？

平 一応ミニコミ誌と言っているんですが、塾がバックアップしてくれているので、受験生と大学生が対象の、ほんと自分たちの言いたいことを書いています。

——どういう？

平 その雑誌を代表している人が固い文章を書くんですね、真心のことだとか心のきしみだとか。だからそれを和らげるって感じて、駄洒落とか外に出てどっかに行つた感想文なんかを書いているんで

す。だから話といえは、内容のどこか、それからこの雑誌をどうやって売っていかとか、また、芝居が好きだから「芝居をやるかね」とか。夢ですけれどもね。

寺内 いや、夢のことではありませんよ。それはできますよ。やろうと思えばね。ほんと。じゃあ、脚本なんかにも興味はある。

平 ええ、脚本を書いて演出な人もやってみたいですね。

寺内 私もあなた方の年齢のとき、戦争でひどいときでしたが、やっぱり夢を持って、それをやりぬいてやろうと思っていましたね。

——代表の人が真心だとか、心のきしみだとか固い文章を書くと言いましたね。では、宗教者が書いたものはどうですか。やはり固

いと思いますか。

平 そうですね。宗教っていま、へんに曲げられて言われていると思うんです。今回、この座談会に出るというので、この『浄土』という雑誌をもらい、それで学校のサークルのみんなに見せたんですが、そのときみんなから「浄土、なにそれ、妖しい」と言われたんです。でもみんなはこういう感覚なんです。宗教の本なんかは、作るほうも宗教の色を出そうとしているから、読むほうもよけいに抵抗しちゃうって感じじゃないかな。

——「妖しい」とつていうのは、どういう意味があるのかな。

村上 なんか思想的なことが書いてありそうって感じ。

平 そう、なんか押しつけられ

て、自分の持っているものを曲げられてしまうんじゃないかっていう恐怖を感じますね。

——でも、新宗教とか最近の新宗教にはおふたりと同じくらいの若い人がたくさんいますよね。そういう人をどう思いますか。友達にはいますか。

平　　いないですね。

村上　友達はいないけど、母が新興宗教のようなものに入っています。それでよくそのことについて話すんです。

——どういうことをですか。

村上　なんていうか、母は仏教系の新興宗教なんですけど、神様みたいな者がいて、お願いすれば助けてくれるってことを信じているわけではなく、毎日お祈りとか

必ずするんですけど、そのお祈りとか、お寺に通うことによって心が落ち着くと言っています。それは言ってみれば母の趣味みたいなものだから、それについて私がいとか悪いとか言う問題じゃありませんが、例えば、私の受験のこととか、私が健康でいられることをその宗教でお願いしたりすることとを、あてつけがましく言われたりすると、文句というか、反抗しなくなっちゃう。

——そんなことをしてくれなくても、自分は自分でちゃんとしていて、と言いたくなっちゃうんでしょう。

村上　でも、母のそういう気持ちかわからないわけではありませんよ。私は人間が死んだら天国と

か地獄とかがあると思っっているでしょう。で、いまの自分はどうかという、特に悪いことをしているとはいませんが、また、特にいいこともしてないんで、死んじやうてからほんとに天国にいけるかどうかという不安があるんです。だから、この宗教に入っていれば絶対に天国にいけるといって、信じられる何かがあれば、入っちゃうかもしれない。だから母の不安な気持ちみたいのはわかるんです。

寺内　その若さだと、死んだ後どうなるかなんていう不安といっても、それほどのものではないでしょう。若い人たちの特権というか特色というか、若い人はどんな時でも、ところでも喜びを探しますからね。そうでしょ。簡単なこと

を言えば、今日のお昼は何を食べようか、とか、それから何しようとか、次から次へと楽しいことを探すでしょ。だから、死んだらなんていうことは普段はほとんど考えないんじゃないですか。それで、今回のように、死とはなんてテーマを与えられてはじめて、「それでは考えてみるか」っていうような感じてはないのかな。

村上 そうですね。普段はほとんどそんなこと考えませんからね。寺内 私なんていまだにそうですよ。だれでも死ぬなんてことは、実際、自分とは関係ないと思ってあるんじゃないですか。平さんのお父さんもそうじゃなかったですか。

平 ええ、父の場合は快気祝い

のことまで考えていました。

寺内 そうでしょ。だから人間という者は生きている以上は、そうしたことで本質的に救われているんですよ。キリスト教の場合なんかは、イエス様がみんなの代わりに十字架で死んでくれているんだから、そこで死は終わっているんですよ。それはつまりイエス様によって救われていくんだということですね。私たちの浄土宗の場合も阿弥陀様によって救われていくんだという安心感があるんです。村上さんが天国や地獄があると思うと言っていました。救われると信じていれば、それで天国にいけるんですよ。この信じるということができないと、何が何だかわからなくなっちゃうんですね。

亡父は仏様になれない

——平さん

地獄は怖いところ

——村上さん

死は大自然に帰る

——寺内氏

平 私は生まれ変わりを信じているんです。

——それは何が生まれ変わると思っていますか。

平 私が死ぬとしますね。肉体はなくなりますが、魂が残って、それがまた生まれてくる何かに入っていくっていう……。

寺内 犬や猫かもわからないよね。

平 そうですね。だから、犬や猫に生まれ変わりたくないからいいことをしようって、引き換えでよ

くない考え方もしれないけど、そう思っています。そして生まれ変わるならよりいい環境、第三世界じゃなくて、日本みたいなのところに人間として生まれてきたいですね。

寺内 仏教でいう輪廻転生を信じているわけだね。

平 そうです。自分ひとりでは生まれたいかなんて勝手に考えて、みんなと話しますが、だれからも「それはちがう」って言わないから、疑問はないですね。

——さつき、『浄土』を友達に見せたら「妖しい」って言われたといっていました。みなさんは信仰するということをどういうことだと思いますか。

平 盲目になっちゃうって感じ。

でも、私の場合、輪廻転生を信じているんだから、これが信仰と言われればしょうがないんですけど、いま言われている、問題になっている宗教をみると、やっぱり盲目で人の意見を聞き入れたりしないって感じがしますね。

——では、どういうのを本当の宗教だと思いますか。

平 キリスト教徒の方を見てみると、あれが宗教かなと思いますね。強い信念を持っていて、私が大学で初めて会った子がクリスチヤンで、その子の話を聞いていると、日曜日にはちゃんと教会にいていて、いま政治を勉強しているんですが、その政治もクリスチヤンとして考えているんです。「あつ、これが宗教かな」って思った

ことがあるんです。

——彼女を立派だと思いませんか。
平 自分でそうはなりたくないけど、人間としては立派だと思います。

——平さんは、お父さんが仏様になったと思いませんか。

平 仏様になるのは父の行ないからだと思えますから、父は宗教に全然関心がなかったから仏様になったとは思いませんね。仏様っていうと、金箔の貼ってある……。

寺内 そうか、仏像を思い浮かべてしまいうんですね。でも、こうは考えない。お父さんのご遺体を火葬場で焼いて、それからお墓に埋めたでしょ。お父さんは大自然に帰って行った、と。こういう意識はあるんじゃないですか。

平 そのほうが近いですね。

寺内 これだと納得できるでしょ。この大自然を仏様と置き換えでもいいんです。経典にはそのようにことが書いてあります。大自然に入っていくんだと。地球はビッグバンから分裂してできてきた、そこからまた何かの拍子で生命が生まれた。それがまたいろいろ分裂していろいろな生き物になった。しかし、分裂したものは、また強烈に結合しようとする力もあるんですね。これが死なんじゃないですか。大自然に帰っていくという。無常ですね。永遠のものはないという。どんなものでもこの大自然から発生し、またこの大自然に戻っていく。これがいのちっていうものじゃないですか。だから、輪

廻転生も考え方としては間違っていない。平さんのお父さんは大自然に帰っていったんですよ。そしてあなた方も大自然から出てきたんですね。

村上さんは天国と地獄を信じているといわれますが、地獄とはどういうところだと思いますか。

村上 苦しみから逃れられないところ。火の海に落とされて、苦しい目にあって、もうこんなことから死にたいと思っても、もう死んでいるからだめ、というようなことがずーっとつづくようなところって感じかな。

寺内 死んでいるんなら、べつに苦しくないんじゃないですか。

村上 えーっ、そうなんですか。寺内 苦しむのは生きているか

らじゃないですか。

村上 とにかくすごく怖いイメージがあって、そこから逃げだしたくてももう逃げられない。だから、与えられた時間のうちに何かいいことをしておかないと、ずーっと苦しむと思っているんです。

——いいことってなんですか。

村上 それがわからないんです。信仰することがいいことなのか、人にやさしくすることなのか、正しいことをすることなのか。

寺内 例えば、あなたがたの身近な体験で、予備校で知り合ったといいますか、予備校時代はどんな感じてしたか。やはり苦しかったですか。

平 受かったらっていうのを考えれば、この苦しみも必然性がある

るっていうように考えていましたから。

寺内 なるほど、希望がね。じや、受かったときはうれしかった。

平 それはもう。

寺内 じや、望みがあれば苦しくても耐えられるって感じ？

平 そうですね。山みたいなのがあつて、いいことがあれば、「いま楽しいけど、いずれこれはなくなっちゃう」って考えるんです。また、反対にどんなに苦しいことがあつても、絶対にいいことがあるって思つて耐えられる。

寺内 じや、いまの生活には満足している。

平 はい。こないだ学校の先生のところ、雑誌のインタビューに行つたとき、先生に「足るを知れ」

つて言われたんです。だから、私としては満足しなきゃいけないと思つているところもあるし、いいものがどんどん出てくるけど、私が必要としているものではないし、与えられれば受け入れるけど、自分から求めてはしないので、かなり満足していると思います。

——じや、苦しいときの神頼みのようなことはないんですか。

平 入試のときはしました。でも、大学ときは、いくら頼んでも自分がバカだったら受からないって思つていたから、自分のためにはあまり、神頼みなんかはしませんね。それに神様とか仏様に頼んでも神様仏様が迷惑しちゃうんじゃないかと思うんです。

寺内 じや、今度生まれ変わる

としたら、男女どちらがいいですか。

平 男。

村上 女。

寺内 どうして女に？

村上 女のひとにしかできないことのほうが強い気がするから。

寺内 強い？

村上 子供を産むとか。

寺内 平さんは？

平 男の人はさっぱりしているし、心で結ばれているような気がするから。

他人より自分を大切に

——平・村上さん

自分だけでは他者に害

——寺内氏

——平さんはお父さんを亡くされて、お父さんの人生を考えましたか。

平 考えました。父の人生は他人のための人生だと思いました。

かわいそうだと思いました。他人のため、子供のためとかで自分のためがないんです。私だったら自分のために生きようと思ってしまいました。死んで何が残ったんだろう。祖父から受けたものを守って、世間から悪く思われないように家の中をちゃんとしてみたいな、もっと自分のために生きてもよかったんじゃないかなと。

——じゃ、お父さんが何かを我慢しているように見えましたか。

平 表面的にはわかりませんが、父は毎晩お酒を飲んでいて、それが体を壊した原因だから、何かストレスがあつたのかなあつて。

——じゃ、平さんは人のためよ

りは自分を大切に生きたほうがいいと思いますか。

平 そうですね。もう、時代が違うと思います。

——村上さんはどうですか。

村上 私も人よりは自分を大切にします。

平 でも、自分を大切にしたらいたかつたら、人を大切にしなければいけませんよね。

寺内 仏教ではね、自分が救われたかつたら、まずひとりでも救いなさいと、それが自分の救いになると。自分だけ救われたいと願っていたら、それは仏教的な考え方ではありません。やはり自分が救われたいと思ったらひとりでも他人を救うことが大切なんです。

自分だけというのは他者に害を与

えてしまうんです。

だから平さんが言っていたお父さんの生き方も、あなたにはいやかもしれないけれど、この仏教の教えに沿った生き方だったんじゃないですか。

やはり、どんな生き方をしても、あなた方がさつき言っていた希望があれば、苦しくても耐えられるというように、人生の道の先に光を見て生きていくことが一番大切なことですね。

——どうもありがとうございます。

非情の世界の発動を

前田利勝

月刊「ナーム」という超宗派の仏教雑誌の編集

集に携わって二十二年。同じく超宗派で仏教を

学ぶ「南無の会」の仲間となつて二十年。いま、

曲がりなりにもこうして自分があるのは、その

間に出会った多くの方々のおかげであつたと、

つくづく思う。

日蓮宗の寺の息子に生まれ育ち、宗門の大学

に通つたが、そのころはまだ、寺にも仏教にも、

自分のこととしての関心が湧かなかつた。その

中に育まれ、息をしているにもかかわらず、ど

こかそれは自分とは無縁の世界、遠い風景のよう
うで、だから率先、宗門の僧侶として身につけ
るべきものを身につけ、次第にそれらしくなっ
ていく友人たちを、まぶしいような、取り残さ
れたような思いで眺めていた。生きているのか
死んでいるのかわからない——そんな人生の仮
死状態から救い出してくれたのが、雑誌「ナー
ム」であり、そこで出会ったさまざまな人、あ
るいは特集をとおしてふれた、すぐれた仏法者
たちであった。

無為に過ごした二十代も終わろうとするころ、
初代の編集長となった酒井謙佑、現南無の会事
務局長から、新しいスタイルの仏教雑誌を作る
から手伝えと声がかかったのだった。

学校新聞も作ったことがない、それどころか
本を読むのが嫌い、人に会うのが大嫌い、もの
を書くなどともない自分に編集の仕事がま

わってこようとは、なんとも皮肉な話だが、以
来二十二年、それが自分の抜きさしならない仕
事になってしまったのだから、皮肉をとおりこ
して不思議としか言いようがない。

今回、本誌の編集部から、教団の外から見た
法然上人と浄土宗について、感じたままを書く
ように言われ、あわてて「ナーム」のバックナ
ンバーを探したら、法然上人と浄土宗に関する
特集が三つあった。最初は法然上人とその宗教
について（昭54・4）であり、次が浄土宗の成
り立ちと現在について（昭57・5）、そして、一
枚起請文について（昭58・2）であった。特集
に協力してくださった諸先生の中に、藤井実応、
寺内大吉、大橋俊雄、高橋良和、石上善応、金
田明進、近藤徹稱、山本空外といった方々の名
前が見えるが、中でも直接聲咳に接する機会が
あった藤井実応、寺内大吉、山本空外といった

方々の名には、とりわけ懐しいものがある。特に寺内大吉先生には編集長の酒井が友人であつたよしみから、仕事以外にも、親しい雑談の中でいろいろ教えていただくことが多かった。

「アハハ……。そうしたら奴さん、すっかりあわてやがってな……」と、誰のことであろう法然上人と弟子のやりとりの一幕を、伝法な口調で話されるのに度胆を抜かれたこともあつた。

いつであつたか「どうも浄土宗というのはアピールの仕方が下手で、たとえば法然上人にいても大切にするあまり、人間的な魅力を消してしまっている。もともと法然上人にあるいいものを、みんな親鸞にもってかれてしまっている……」というようなことを言われたことがあつた。

門外漢の自分としては、なるほどそういう見方もできるな、という程度に聞いていたが、そ

れから幾度か各宗の祖師方の事績にふれる機会があつて、法然上人についても自分なりの印象（それはほんとうに印象という程度のものなのだが）を抱くようになった。

それは、ひとことと言えば、類いなく気高い精神の持ち主ということである。これは他の祖師方との比較の中でそう思うということではなく、法然上人の仏法者としての完成の姿を、あるいはまた、法然上人において完成された宗教の特質をそこに見る思いがするということである。何をもってそう思うのかといわれると、それは一種の臭覚のようなものがそう感じさせるのであつて、これこれこうでと説明も証明もできにくい。ただ、ひとたびそのことに気がつく、法然上人の事績のどこを切り取ってみても、残された言葉の一句にも、一貫してそうした香ぐわしさのようなものが感じられてくるのである。

しかしいま、あえてそれが最もよく表われているものをあげれば、やはり「一枚起請文」であろう。あの、一字を加えることも引くこともできない簡潔な文章を、声を出して（心の中ででもいい）読むと、流れるようなリズムの中に、おのずから立ちこめてくるものが、読む者の魂を安らがせ、満たし、浄化せずにはおかないのである。法然上人の宗教にあつては無駄な詮索はまったく無用、この一文をくりかえし拝読し、その言うところに従えば、安心至極疑いないのである。つまりここでのいう気高さとは、単なる境地を呼ぶのではない、「力」なのである。

もうだいぶ以前のことだが、滋賀県で知能に重い障害を持つ人々の家（止揚学園）を守っている福井達雨さんとお会いしたことがあつた。その時、福井さんが言った「真実の福祉はヒューマニズムではできないんです。ヒューマニズ

ムというのは人間の主義でどうしても限界がある。いのちの世界、つまり無限の世界に立たないと、福祉活動は失敗します」という言葉が今も忘れられないでいるが、法然上人に見える気高さとは、ヒューマニズムを超えていのちの世界に立った人のかもし出すものとも言える。『私語燈録』にみえるやわらかさ、やさしさも、その源は同じである。

○

「宗教というのは、自分の生きられていることに真剣に取り組んでいくことのほかにはない」

「いのちの根源には、まりのついた人間になれ」

「ましな本には光明があるものだ」「人間、真理を追って生きられるようになったら幸せだ」

「空とはおかげさまということ」「南無とは頭を下げること。何に頭を下げるかでその人間が決まってくる。金に頭を下げるのか、地位や名

譽に下げるのか……。わしは、いのちの根源、阿弥陀さまに、おかげさまでと頭を下げる」「世の中に楽器はたくさんあるが、木魚は人間が人間になる最高の楽器だ」「南無三宝と南無阿弥陀仏は別のものではない。それが違うものだと言っている間は、まだ青二才の頃の道元のレベルだ」「自分しかできないことを楽しんでやる。それが南無阿弥陀仏ということだ」……以上、昭和五十七年十一月八日、東京滝野川の正受院で行なわれた山本空外師の説法中、心に残った言葉（取意）の一部である。

ちよつとおこつたような、吐きすてるような話しぶりに、最初はつきはなされたような感じを受けたが、話の折々にハッと目の覚めるような言葉が飛び出してくるので、午前午後とすっかり釘づけにされてしまった。

いろいろな方を取材させていただくうちに、

人は言葉以上にその表情から多くのものを伝えるものだと思うようになった。また、その人の住居や仕事場も、そのたたずまい、何気なく置かれたものまでが、よくその人の人柄を偲ばせてくれる。だから取材に行くと、相手の表情から部屋の様子まで、失礼なほど目を凝らすくせがついている。

この日お目にかかった山本空外師は、話もさることながらウォッチング(?)の対象としてはまさに天下絶品で、実のところはその表情、一挙手一投足にすっかり見とれていたと言っている。中でも特に印象が深かったのは、黒板に何枚も重ねて懸けた大きな模造紙に文字や図を書くときの手の動きで、マジックインキを持った手がすうっと伸びて、紙の上に最初の一点がおりされるとき、ここしかないという位置の面白さ、いましかないという呼吸の絶妙さは息を

のむほど美しく、そこに師の悟境を垣間見る思
いさえした。

この日に撮った師の写真のうちの、特に気に
入った一枚を雑誌に掲載したのだったが、小さ
な眼鏡ごしにこちらをにらんだそのお顔は、見
ようによつては皮肉にもユーモラスにも見える
のだが、私には、たしか法然上人の言葉であつ
たと思う「真剣に往生のことを考えている人の
顔は、ちよつと世間を恨んだようなところがあ
る」を、ほうふつとさせるものであつた。とも
かく「阿弥陀さまは何も浄土宗のために本願を
たてられたわけじゃない」と、さらりと言つて
似合う人の顔である。

すぐれた念仏者の中には、どこかすぐれた禅
者と共通した雰囲気を感じさせる方がいる。た
えば寺内大吉、山本空外、それに最近亡くな
られた藤吉慈海といった方々には、その表われ

方は異なつても、どこか禅的なものを感じさせ
られるのだが、それは「安心」と「悟り」が究
極において同じものだからで、それが別なもの
だと思つている間は、それこそ仏法においては
青二才なのだろう。

自分が数年前から使うようになった言葉に「非
情の世界」というのがある。不人情のことでは
なく、人間の都合や情実を超えた世界というこ
とで、いつてみれば前述の「ヒューマニズムを
超えた世界」であり、「安心至極の世界」であ
り、「空の世界」であり、「悟りの世界」であ
り、つまりは「いのちの根源には、まりのついた
世界」である。表現の違いはアプローチの違い
である。編集という仕事をとおして、いつも外
側から、人間の側から仏法と、仏法者たちを見
つめてきた。そうして見続けていくうちに、す
ぐれた仏法者に共通して見えてきたのが、私に

としては「非情の世界」であつたということである。およそ祖師といわれる人々で、この「非情の世界」を心の奥底深く抱いていない人はなかつたが、私が特に法然上人にその感を深くすることと、類いまれなる気高さを感じることは、まったく一つのことである。

法華經の信心一筋に生きてきた師父に言わせれば、私のやっている「ナム」も「南無の会」もお笑い草であつた。そんなもので信心が確立できるのか、ということである。

たしかにそうである。ふみわかるふもとの道の多いことを知つていても、実際に自分の足でふみ入らない限り、高嶺の月を見ることはできない。

しかし、ふもとの道がなにゆえ多くあるのか、どういう道のりで高嶺に至るのかに目を凝らしていくうちに、心の中に一つの灯りがともり、

おのずから眼の前に開けてくる一筋の道を発見することもあるのである。

晩年、大病を得てからの師父の言葉には、私の心にいつまでも響くものがある。ある時、師父を元気づけようとして法華經の勉強会をやるうと提案した私に、「わし、もう飽きちやつた」と言つたのには驚いたが、その時、すでに師父はそういう世界に出ていたのだと気がついた。「何宗がどうのつて、あれ馬鹿みたいだね」とも言つた。そして、一人ごとのように「お題目のほかは何も知らない愚者に見えてはじめてほんものなんだ。何やら才覚ありげに思われたり、振る舞つたりするのは、信仰者として恥ずかしいことだ」と言つたひとことは、編集だ、会の活動だと、ありもしない才覚をさもありげに振る舞わなければならぬでいた私に残した遺言であつたと思つてゐる。そして、以来私には、浄

土宗の安心起行この一紙に至極せりという「一枚起請文」も、詮ずるところ「智者のふるまいをせずして、唯一向に念仏すべし」の一句に極まるように思えている。

長らくこういう仕事をしてきて、また、師父の生き方死にいく様を見てつくづく思うのは、不完全な人間が完全なるものの器となることの不思議である。この不完全な人間においては仏法の器はないという事実の懐しさである。実際、若い頃にはこの両者がどうしても一つにならなかった。完全なものとは不完全なものとは相容れないものとして、眼前にバラバラにあった。悟りと迷いの間には無限の隔たりがあった。自力と他力、娑婆と浄土、生と死……は相反するものであった。その頃には結局、見ているようで何も見えていなかった。

現代は、このバラバラの認識、価値観にすっ

かり覆われていて、人々はいよいよ酸欠状態になっていくようである。酸欠状態とは、いのちが呼吸できないということである。

伝統仏教にこの危機を救う力がほんとうに無いならば、そんなものは無くなってもかまわないと思っっている。ただ、もしあるのにその力を出さないでいるのであったら、それは伝統仏教に生きる者の、怠慢ではなく犯罪ですらあると思う。

法然上人の類いまれなる気高さは、力である。その気高さを、貴族的、あるいは上流社会的な雰囲気として伝承していくのではなく、バラバラなものを包含して一つにまとめることのできる「力」として、展開してほしいと切に願う。人間の都合はもとより、教団の都合も超えた「非情の世界」の発動が、今こそ期待されるときであると思っっている。（月刊「ナーム」編集長）

使命感と死生観

伊藤桂一

私は今年七十六歳になる。世間的に言えば、もう老境ということになるが、自分では、老境的なことは一切考えない。壮年、むしろ青年的な考え方を持して生きているので、気分はともかくさわやかである。

以前、私は本誌に、戦場体験の中で、自分なりに一応の死生観を確立したことを書いた。二十二歳の時、山西省の戦場で、運命を達観して、人生を肯定的、好日的に生きようと念願した——といった内容である。この信条は、

現在までそのまま身に持している。この信条は、死ぬ時が来たら、それは天命だから、いつ死んでも不平はない、ということである。

しかし、戦場での不惜身命的な考えと、戦後五十年を経てきての現在とでは、いくらかの考え方のニュアンスの違いはある。その一つは、戦場での死生観は「死なば死ね」といった生命の放棄感が基底にあるが、戦後の考えは「死ぬことになれば仕方はないから明るく観念するが、できればなるべく長く生きたい」

———という思いがある。これは、はじめからのちを賭けている戦場と違って、現在は「生きてしななければならない仕事があるから」ということである。つまり、戦後の生活には、

身命をだいじにしていかなばならぬ、仕事への使命感があったからである。生き残り戦中世代としての、果たしていかなばならぬ義務と責任を感じたからである。

私は、天台宗の寺院に生まれたが、幼い時、住職であつた父に死なれ、諸種の事情で寺を出てしまったが、幼少時に寺院生活をしてい たため、精神的に、自身のことより他者のために尽くすことを考えるという思想が、おのずと身についてしまっている。したがって、戦場生活をしている時も、別に従軍僧ではなかつたけれど、死者の出るたびに、死者のために祈ってあげることには忘れなかつた。

私は、前後七年間、中国の戦場で暮らした

が、はじめは北方の山西省で暮らした。山西省は九州ほどの面積だが、そのほとんどは黄土の山岳地帯である。ここでは私は騎兵聯隊に所属して生活し、作戦に参加したが、山中で死者が出ると、谷間で火葬にする。その場合は、付近に、燃料になる灌木か、小集落がなければならぬ。人を火葬にするのは、たいへんな手数と時間がかかる。死者の出るごとに、私は死者を悼む短歌をつくって、手帖にしたためておいた。死者への祈りをこめての悼歌である。そのいくつかを、左に記してみる。

* 兵いくた崩れし廟のかたわらに
しずかにいます息絶えしまま

* 山に寝て山に疲れて戦いて

山で焼かるるいのちなりけり

* ひとことをなんといひしか聞きとれず

ひとのいのちのかくて終われり

* 灌木の根にもとどかぬ手をのべて

なにを索むと死せしか兵は

* 狼の山に吠えいるたそがれを

友を茶毘に付す涙ながれぬ

* ここに今日もあわれとうとしひと柱

ひとすじの煙となりにつけるかも

* けむりけむりあわれ晋南の山奥に

屍を焼くけむりひとすじ

* 枯草のなかに朽ちにし友の霊よ

赤き入陽を寂しむらんか

戦況が忙しく、死者を焼いているゆとりのない時は、死者を死者の乗っていた馬に寄せ、火葬のできる場所まで運んだ。山中でうまく輜重隊のトラックにでも出会うと、死者を護送してもらった。戦闘行動を主としているからである。任務が優先する。

戦後、私は、自身の体験をいくつかの小説にまとめたが、自然に人の話を聞き、いろいろな部隊の生き残りの人たちとつき合い、気がついてみると、戦記作家ということになった。戦記——というのは、どんな挿話も必ず死者が関わっている。あだやおろそかには書けない文学の分野である。

幸い私は、先生が仏教寺院のためもあって、

作品の感触に清潔ななにかがあるとみえ、戦中世代の人たちから、次第に作家としての信頼感を得るようになった。私自身も、戦中世代の生者死者を含めた人たちのために、戦記作家らしい生き方をしようと念願してきている。私は私に、いくつかの制約を課して、それを私自身の生き方の信条とした。

一、平素の身だしなみをよくし、省て恥じない生き方をする。

一、語り部としての資格を持つために、他のジャンルの文学作品に劣るような仕事をせぬよう努めること。

右の条件は、相当きびしいものであり、右の条件を守りたいために、左のような生活態

度を考えた。

一、酒、タバコ、美食、及び遊興的な遊びを慎むこと。

一、社会的な出世、及び家庭的な幸福を望まないこと。

右の項目のうち、酒はもともと無縁だったので、飲まなくても何ら痛痒はなかった。タバコは戦後ものんでいたが、ある時期からやめた。美食はもともと関心がないし、賭け事や、麻雀、ゴルフといった遊びもしない。つまり、小説勉強に忙しかったからである。

社会的な出世を断念したのは、出世すると責任を課され、小説勉強のエネルギーを割かれるからである。家庭を持つこともそうで、私

は結婚したのは五十歳になってからだった。

友人から、よく、酒もタバコものまず、美食もせず、遊び事も忘れて、なんのために生きているのか、とふしぎがられた。仕方がないので「生きてるだけでたのしいから」と答えていたが、しかし、自分なりの使命感があつて生きていることは、それ自身たのしいものである。そうして何かの使命感のために長く生きたいとすれば、当然、何らかの生活上の犠牲は払わねばならない。大酒を飲み、タバコもやり、暴食し、風紀もみだし、といった生活をしていれば、だいたい六十代で人生を終えねばならない。たのしく生活して早く死ぬか、使命感のために生活を犠牲にしても

努めて長く生きるか——人間はこの二つのうちの一つを選ぶことになる。これは原則である。

私は、戦記作家としての使命感のため、身だしなみをよくした生活をしてきたが、これは結果として、自身の健康状態の保持にはきわめてよいことだった。七十六歳だけれども、年齢を考えないほど元気なもの、そのためである。もともと、生活のための仕事、それになり苛酷な小説勉強を重ねたので、四十五歳の時、重症の神経痛で倒れ、爾来五年間、整体会協会の野口晴哉先生のお世話になって健康を回復した。この野口先生健康理論は、そのまま人生論としてきわめて有益のもので、

私はつねに野口先生の健康論、人生論を、自身の生きる支えとしてきているが、死と生の問題について、野口先生はつぎのように語られている。この文章を書くにあたって、便宜なので紹介するのだが、先生には大冊の『野口晴哉著作全集』が刊行されつつある（先生自身はすでに故人である）。

へ人間には別に死というものはなく、一刻ずつ死につつあって、その終わりがあただけである。したがって、一刻ずつの死につつある時間を充実していかねばならない。つまりそれがよき生き方となる。へ九十歳以上は老人と呼ばれても仕方がないが、それまでは老人ではない。

私は先に、私を七十六歳だと書いたけれど、野口先生のいわれる九十歳の老人までには、まだ相当の年月がある。むろん、この年月も無駄にはできず、使命感を果たしてゆくための年月として、だいじに使っていかなければならない。私は私なりに仕事の予定も立てているし、その仕事は九十歳になっても終了するものではない。しかし、生きつづけている間は、仕事もまた、つづくのである。仮りにその途中で死なねばならなかったとしても、なにぶん、ずいぶん早くに死生観は樹てていたことだし、観念して、眼をつむればよいことである。戦後には戦後の、私なりの、さらなる死生観も身に加えたので、死ぬ時（野口

先生の説でいえば刻々の死の終わる時）が、いつそたのしみなくらいである。死生観——という、とかく深刻に暗く考えることになつてしまふけれど、使命感を果たしてゆく、という生き方に立脚して考えれば、死は明るい、満ち足りた終わりの刻——ではないかと思う。

私は、前期の軍務を、昭和十六年の秋に終えていったん帰休したが、ひと月余りして真珠湾攻撃があり、戦火は南方へ拡大した。当然、召集が来て南方行きと覚悟していたのに、一年して再度の軍務の行き先は揚子江岸だった。中国にいた兵員も、多くは南方に転用されている。私の所属した山西省の第四十一師

団も、昭和十八年になるとニューギニアに転用され、玉砕してしまった。私がこの師団に残っていたら、ニューギニアで死んだろうし、昭和十八年になっての召集で南方へ行っていたら、これもたぶん死ぬことになったろう。

こうした事実を考えてみると、どうしても、お前を生かしてやるから、その代わりに役に

立つ仕事をせよ、という、神か仏の声を聞く思いがしたのである。私はその声に従っている。使命感——というのは、だれに頼まれたわけでもない。自分で自分に課すものである。それによって、よい生き方、また、よい死に方ができる、と私は思っている。

(作家)

●四月号から本誌の編集を始め、あつというまに本年の最終号を迎えてしまった。マンスリーというには、この間に二度も合併号を出したのだから正確ではないし、第一、読者の皆さまに對し心からお詫びを申しあげるのが筋であらう。申しわけありませんでした。

●巻頭の随想に二人の女性の登場を願った。お二人の岡さんは肩書が水産学博士というのでどんなにこわい方かと思つたら、写真でご覧のような妙齡の美人である。日頃から美しい鳥たちに接しておられるせいかもしれない。もう一人の五社さんは、ご自身の大患も含めてずいぶん辛い日を送られた。私も、亡くなつた彼女の父君、英雄氏とは三十余年前からのつきあひがあつたので感慨もひとしおである。今後のご活躍を祈りたい気持ちでいっぱいである。

●作家の伊藤桂一氏には、締めくくりにつもりで四月号以来の再度のご執筆をお願いした。ご存知の読者も多からうが、伊藤氏は成田総長こと寺内大吉氏や、本年度の文化勲章受賞者司馬遼太郎氏、永井路子、杉本苑子、黒岩重吾氏らと共に「近代説話」の同人となり、共に直木賞を受賞された戦記文学の第一人者である。温厚、篤実なお人柄は文章の隅々にまで現われているので、ぜひ味読をお願いしたいと思う。

●巻末随想の前田利勝師は月刊「ナ-

ム」の編集発行人で、ご自身は日蓮宗の宗侶であられる。他宗から見た浄土宗や法然上人に對する感想を拝聴することも意義のあることと思つてお願いしたし、松原泰道師に続くこうした企画は、今後とも人を得れば随時続けていくつもりである。

●成田総長を囲む女子学生との座談会は大正大学の学長室を拝借して行なわれた。当初は寺庭の女子学生で、この案も出たのが、いっそ在家の子女のほうが良いのではとの意見が多数を占めた結果である。総長の円満相好に初めて接し、こわいお坊さまのイメージが無くなつたと二人とも語り合つていたのが印象的であつた。

●この号がお手許に届くと、ほどなく新年ということになろうかと思われる。一月号から「浄土」のロゴが中村門主の毛筆体に変わるはずだし、増上寺藤堂法主の特別寄稿もあるはずである。皆さまのご健康を祈るや切である。

(編集チーフ・小川有順)
編集スタッフ

栗田順一
齋藤晃道
細田芳光
大室照道
太田正孝
長谷川岱潤
村田洋一
石上俊教

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一〇部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申しあげます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたら遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

五十九番 十一月合併号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成五年十一月二十五日

発行 平成五年十二月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷

写真植字 文化フォトタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七



SAPPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリー-half〉



サッポロ生ビール カロリー-half

飲酒は20歳を過ぎてから

●ご協力のお願い: 自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

人間のやさしさをクルマに。

すっきりが、いい。

新しいローレルと、日本。



頒価五百円

Photo: ローレル 25 ツインカムメダリスト (オプション装着車)



松方は、**こ**りゃあいいと思った。

◎ 本木は、**な**るほどと感心した。

◎ 方・本木のローレル評判記。LAUREL 誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。 本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル 25 ツインカムメダリスト……全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●RB25DE(6気筒ツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オープンセーフティオートエアコン●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とは異なる条件下で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823……お近くのローレル販売会社へ